

故海軍中將飯田延太郎勲章

加授、件

右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和十三年十一月五日

内閣總理大臣公爵近衛文磨

内

閣

賞勳局第四四四號

内閣勅令第一一七

昭和十三年十一月四日内閣書記官長



昭和十三年十一月五日

内閣書記官長

内閣總理大臣



賞勳局總裁



故海軍中將從三位勲二等功四級飯田延太郎
ハ明治三十年海軍出身以來累進シテ中
將ト爲リ昭和六年離現役ニ至ルマテ終
始一貫克々其ノ職務ニ精勵シ就中海軍
大學校水雷術^戦教官ノ職ニ在ルヤ豫テ明
治三十七八年戰役從軍中體得セル蘊蓄
ヲ傾ケ獨自ノ水雷戰術ヲ創成セリ之レ

賞勳局

我カ海軍ニ於ケル近代水雷戰術ノ濫觴
ニシテ現在猶其ノ骨子ハ之ヲ繼承シツツ
アリ又長門艦裝員長トシテハ其ノ卓越セ
ル戰術眼ヲ以テ近代式主力艦ノ第一艦
ヲ裝備シ列國驚異ノ的トナレリ更ニ第二
艦隊司令長官在職中ハ實踐以テ部下ニ
臨ミ術力ノ向上ニ專念シ我カ海軍ノ艦
隊戰鬪ニ於ケル水雷戰法ノ戰鬪力培養
ニ盡瘁シタル等其ノ功績顯著ノ者ニ候
處本月三日死去セル趣ニ付此ノ際特ニ

昭和十三年十一月五日
昭和十三年十一月五日
昭和十三年十一月五日

同日附ヲ以テ旭日重光章ヲ加授セラレ
度此段允裁ヲ仰ク

内
閣

海軍中將從三位勳三等功級飯田延太郎
右者明治三十年海軍出身以來身ヲ現職
ニ奉スルコト三十三年其ノ間海軍大學校教
官、第二驅逐隊司令、英國駐在、薩摩艦
長、吾妻艦長、敷島艦長、長門艦裝員長
長門艦長、佐世保防備隊司令、第二水雷
戰隊司令官、海軍水雷學校長、馬公要
港部司令官、舞鶴要港部司令官ヲ經テ
佐世保鎮守府司令長官、第二艦隊司令長官

海軍

ノ諸要職ニ歷任シ終始一貫克ク其ノ任ヲ盡シ
功績極メテ顯著ナリ其ノ著明ナル業績ヲ
摘録スレバ左ノ如シ

一明治三十七八年戰役ニ於ケル水雷肉迫襲撃ノ
主唱者ニシテ第十四艇隊艇長、朝霧艦長
トシテ自ラ戰場ニ於テ之ヲ實行シ偉功ヲ
奏セリ

二海軍大學校水雷戰術教官在職中ニハ豫テ
明治三十七八年戰役從軍中休得セルヲ認
賞

ヲ傾ケ獨自ノ水雷戰術ヲ創成セルガ石ハ
帝國海軍ニ於ケル近代水雷戰術ノ濫
觴ニシテ現在ニ於テモ其ノ骨子ハ之ヲ継
承シツ、アリ尚大正四年乃至九年戰役中
ニ英國駐在被仰付英國艦隊ニ乗組
ミシ際ニハ英國艦隊司令長官ニ戰法ニ
関スル諸獻策ヲナシ其ノ奏功ニ寄與ス
ル所大ナルモノアリタリ

三長門艦裝員長トシテハ其ノ卓越セル戰
術眼ヲ以テ近代式主力艦ノ第一艦ヲ裝備
シ其ノ威力ノ列國驚異的トナリシハ衆知ス
ル所ナリ

四第二水雷戰隊司令官トシテ實戰的訓練ヲ勵
行シ特ニ夜戰ヲ以テ渡洋進攻敵艦隊ヲ迎撃
之ヲ漸試スル水雷戰法ヲ確立セリ

五第二艦隊司令長官在職中ハ實踐以テ部下ニ
臨ミ典型的武將トシテ全將兵ノ士氣ノ振作

ニ努メ術力ノ向上ニ專念シ帝國海軍ノ艦
隊戰闘ニ於ケル水雷戰法ノ有形無形ノ戰
闘力ヲ培ヒシ功績ハ洵ニ大ナルモノアリ

昭和六年離現役後ハ專ラ後進ノ誘掖ニ意ヲ注
キ最近ハ大日本海洋少年團ノ理事長トシテ
青少年ノ海洋的訓育ニ盡瘁シツ、アリシガ
不幸病ヲ得^{（瘧疾）}死ニ仕候ニ付テハ特別、御詮
議ヲ以テ旭日重光章加授ノ恩典ニ浴
セシメテ度此段及上奏候也

昭和十三年十一月四日

海軍

海軍大臣米内光政



履 歴 書		第 年		月 日		任 免 賞 罰		資 格		在 職 年 數		通 算	
海軍中將從三位勳二等功四級		飯 田 延太郎		明治八年二月十三日生									
大正十二年		十二月二十五日		海軍少將		勳二等瑞寶章 (定例)		勅任					
同 十四年		十二月 一日		海軍中將		同							
昭和 三年		十一月 十日		大禮記念章						七年四月		七年四月	
同 四年		一月 十五日		正四位									
同 六年		三月二十日		待 命									
		三月三十一日		豫備役									
昭和十二年		四月 十五日		從三位									
		二月 十三日		後備役									
大正十三年		三月 十九日		軍艦北上ニテ居留民保護ノ任		勅任							
		四月 十六日		務ヲ帶ビ青島外國鎮戍									
				加 算									
				計									
				七年四月									
				計									
				三月 三 月									
				七年七月									
				合計									

海 軍

七月一日英國駐在被仰付

海軍

同七年	九月九日	英國「マラヤ」乗艦
同七年	四月九日	補薩摩艦長
同八年	七月五日	補吾妻艦長
同八年	八月五日	補敷島艦長
同九年	十月二十日	補長門鐵裝員長
同九年	三月二日	補長門艦長
同十年	十一月一日	大正四年乃至九年戰役功ニ依リ金三千七百圓ヲ賜フ
同十年	十一月一日	任海軍少將
同十一年	同日	補海軍軍令部出仕
同十一年	八月一日	免本職補佐古保防備隊司令
同十一年	十一月一日	免本職補第二水雷戰隊司令官
同十一年	十一月二十五日	敘勲三等授瑞寶章
同十三年	十一月一日	免本職補海軍水雷學校長
同十四年	八月一日	免本職補馬公要港部司令官
昭和二年	十一月一日	任海軍中將
昭和二年	十一月一日	免本職補海軍軍令部出仕
同三年	五月十六日	免本職補舞鶴要港部司令官
同四年	十一月十日	免本職補佐古保鎮守府司令長官
同四年	十一月十五日	敘正四位
同五年	十一月十一日	免本職補第二艦隊司令長官
同五年	十一月一日	免本職補海軍軍令部出仕
同六年	三月二十日	待命被仰付
同六年	三月三十日	豫備役被仰付
同六年	四月十五日	敘從三位
同	同日	特旨ヲ以テ位一級被進

海軍全書十三行軍旅（本出納）

同
十三年十月三日
薨去

美濃半葉十三行紙（本田勝）

179

海
軍

裏
面
白
紙

内閣 海軍 第三号

海秘人第五二三號

昭和十三年十一月四日

海軍大臣米内光政

内閣總理大臣公爵近衛文磨殿

海軍中將飯田延太郎叙勲、件
別紙上奏書進達ス

海軍

44
13.11.4.
受付
80